富雄丸山古墳の調査　第１～３次

富雄丸山古墳　丸山一丁目

富雄丸山古墳は、富雄川西岸に位置する古墳時代前期（４世紀後半）の大型円墳（直径86m）として知られてきました。奈良市教育委員会では、奈良市西部の文化財を活用していくために、５年計画で発掘調査を進めています。ここでは、第１～３次調査の成果を速報します。

第１次調査

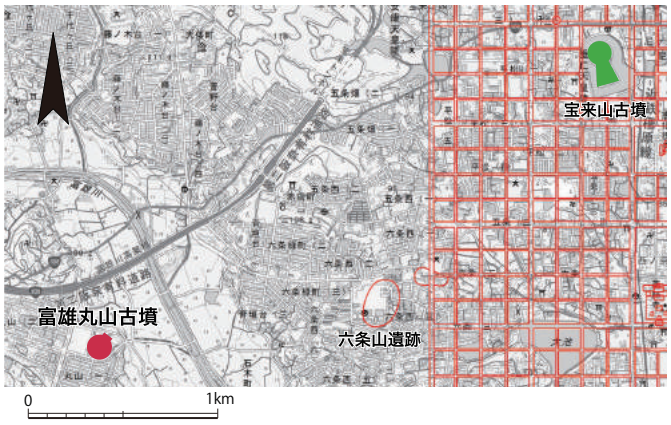
発掘調査計画を作成するために、航空レーザ測量を実施しました。その結果、従来の認識を上回る直径約110mで３段築成の造出し付円墳である可能性のあることが判明しました。

第２・３次調査

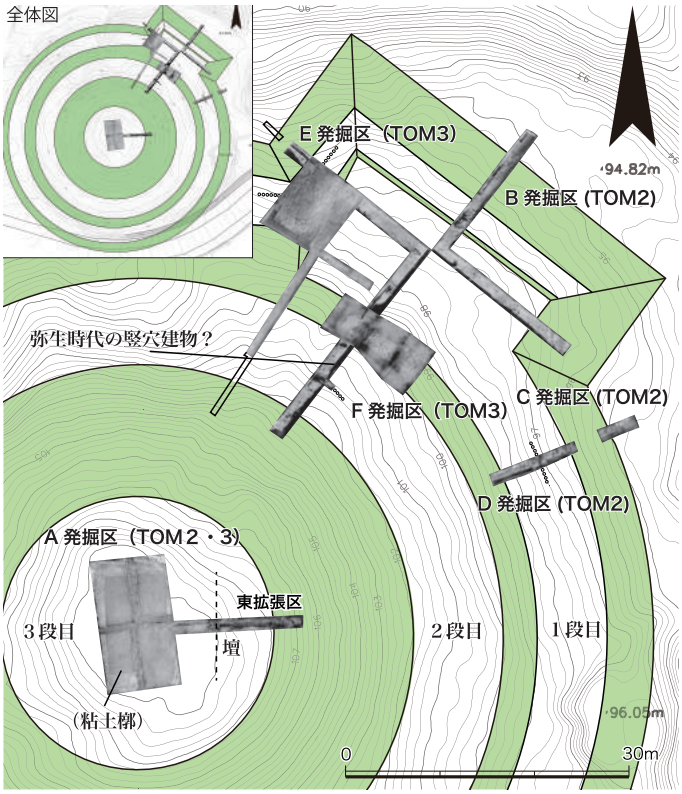
墳頂部　1972年に奈良県が発掘した埋葬施設の再調査を実施しています。ここでは発掘調査体験で市民等と土をふるいにかけて掘り進めています。２年間で墓坑１段目の輪郭を確認し、後述する副葬品の一部が出土しました。また、埋葬施設東側では、墳頂平坦面の中心部がさらに１段高まる壇を確認しました。

墳丘　各発掘区で墳丘の構造に関する所見を得ました。墳丘は各段の平坦面が幅広く（８ｍ前後）、斜面が急傾斜であり、葺石の多くが転落していました。 墳丘裾の傾斜変換をもとにすると、直径は復元で109mとなり、日本最大の円墳と判明しました。１・２段目平坦面では、その中央に円筒埴輪列がめぐります。概ね２段目以上は地山削り出しで古墳が成形され、以下では盛土を施しています。そのため、２段目の埴輪列は布掘りして据えていますが、１段目は盛土しながら据えています。なお、古墳築造以前には弥生時代の遺跡があったようで、竪穴建物の一部が弥生時代後期の土器とともにみつかりました。

造出し　造出し北西側では、斜面が２段になっており、葺石（ふきいし）が良好に残存していました。また、墳丘１段目平坦面の埴輪列に接続するとみられる埴輪列も確認しました。一方、反対側（南東側）の斜面では段築を確認できず、左右非対称の構造となる可能性があります。



富雄丸山古墳位置図（1/40,000）



発掘区の位置（1/800）

造出し北西側の葺石と埴輪列（北から）

出土遺物

埋葬施設の再調査では、斜縁神獣鏡、鍬形石、管玉、銅鏃、鉄器（刀・剣・刀子・鏃・鋤先）、小札、円盤状土製品、埴輪が出土しました。

なかでも、斜縁神獣鏡はこれまで富雄丸山古墳での出土が知られておらず、重要な発見です。鍬形石は小さな破片ですが、京都国立博物館所蔵品（重要文化財）に接合するとみられます。

造出し北西側で出土した埴輪は、①底径約25cm の普通円筒埴輪で、底部に透孔がなく、２段目に長方形や三角形の透孔をもつもの、②底径30 ～ 34cm とやや大きく、底部に半円透孔があり、千鳥配置で２段目に長方形透孔のある朝顔形埴輪、③鰭付楕円筒埴輪、の大きく３種類があります。いずれも黒斑をもち、外面はタテハケあるいは静止痕のないヨコハケを施すもので、埴輪編年Ⅱ期（４世紀中頃～後半）に位置づけられます。

形象埴輪は、家・蓋・盾・草摺等が出土しており、いずれも形象埴輪のなかでは最古型式に位置づけられるものです。

造出し北西側で出土した埴輪

第２・３次調査で出土した副葬品